

### (桜の開花)

皆さんもおそらく春の陽気に誘われて、今日などは花見に出かけられたに違いない。今年も開花が早いと言われていた桜の花も、昔ながらの4月上旬に開花のピークを迎えたようだ。私の住む町から眺める二上山の山肌にも、ピンクの塊が点々と見えるのは、ヤマザクラかソメイヨシノであろう。この間まで寒い寒いといていたのに急激な季節の（自然の）変化、春の訪れである。

幼い新入生が真新しい学生服を着て、親御さんと幸せそうに満開のサクラの下で撮影している光景を最近では見なくなったのは、桜の開花が早くなったせいであり、この風物詩が見られないのはややさびしくもあったが、たまたま昨日出かけた京都原谷苑への道すがら、今年はピカピカの一年生と桜に出会うことができた。

### (花見を楽しむ文化)

桜といえば、花見が思い浮かぶ。私の母校は鳥取県の米子東高校であるが、関西在住の同期生たちが、毎年近隣の桜の名所を巡って、桜の下で飲食している。案内状はもらうが、あいにく大半がそら組の活動日と重なりあって参加できないことが多い。

日本の花見を構成する重要な3要素は群桜（ぐんおう）と飲食、群衆の3つといわれる。一本とか数本のサクラではなく、群れ咲く花の下で大勢の人々が集まって、飲食を伴いながら愛でる。長屋の花見のような都市民衆文化の光景が広まったのは、江戸時代の享保期のころといわれている。徳川8代将軍吉宗が、庶民の楽しみとして花見を奨励したことも大きいようだ。江戸の各地にサクラをたくさん植えて、花見の名所にしたのは吉宗の命によるものだそうである。こうした江戸の風が全国の城下町にも吹いていったらしい。

サクラは世界各地で咲いているし、花を眺めて楽しむことは、世界各地で普通に行われている。しかし日本の花見は世界でも類まれな風物詩ということが出来るだろう。日本では、サクラの開花に人々がどっと繰り出す。上述の3要素が密度の濃い独特な雰囲気を作り出す。

最近多く見かける外国人観光客にも、日本の花見についての印象を聞いてみたいものである。

### 余録：桜の花弁について

バラ科の桜は、基本的に花弁は5枚であるが、異変は見られる。

愛好家たちの研究によると、3弁から8弁までが見つかったという。

かくいう私も数年にわたって、同じ樹から、3弁と4弁の花に出会っている。結構異変はあるものだ。

同じ個体、同じ枝の中でも、突然変異で異常となることがある。花びらが散ったのではなく、裏面のガクも確かに3つと4つであった。



満開のベニシダレザクラ

( 京都市北区・原谷苑にて)

以上